

特別陳列 前田家 武の装いⅡ

特別陳列 日本画家 池田瑞月 一草花へのまなざし—



池田瑞月《草木写生画卷》

■ 琳派

■ 初夏の優品選【絵画・彫刻】

■ 塗りもの —うるしと素地—

- 6月の企画展示室
- 6月の行事予定
- 学芸員コラムご存知ですか
- 土曜講座 開講します
- 夏休み体験講座 参加者募集！
- アラカルト ただいま展示中

日本画家 池田瑞月

—草花へのまなざし—

6月1日(木)～7月9日(日) 会期中無休

学芸員の眼

今回展示する《草木写生画卷》は、卷子装(巻物)になっており、右から左へ適度な幅に広げ、スクロールしながら楽しむものです。巻物というのはどれも、画像を途中で切り取って紹介するのが難しいもので、なかなか「切れ」のよいところを見つけないのができません。本作もそうで、一つの草花が終わるまえに、次ぎに来る新たな草花が重なって描かれています。そのように描いためには、見る順に右から左に描くのではなく、逆に左から右へと描いていかなければなりません。制作中の瑞月の写真(下)を見ると、不鮮明ながら左から右に描いていることが伺えます。本作は画家としての、修練の集大成ともいえますが、絵巻物のように見ることを念頭に制作した、「瑞月の一大植物絵巻」といえるでしょう。

金沢に生まれ、京都で活躍した池田瑞月(一八七七～一九四四)。その画業は今なお不明な部分が多く、石川県内ではあまり知られていない存在です。瑞月の紹介は金澤神社を中心とした熱心な支持者がたよる平成二十五年の展覧(於しいの木迎賓館)が、県内における嚆矢でした。

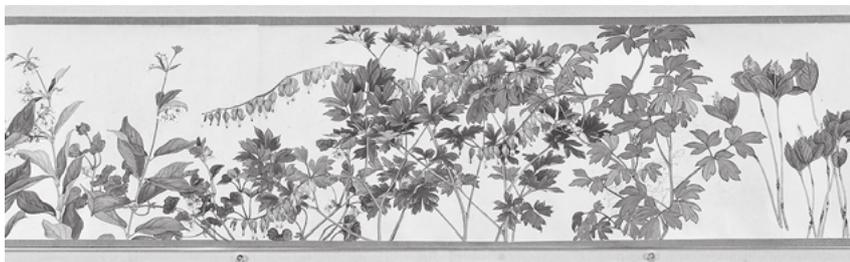
瑞月は京都に出て木島桜谷に師事しています。が、それ以前の金沢での修業時代は不明です。しかし、画題を植物一筋にもとめ、すぐれた写生画をのこした稀有な作家であったことは間違いありません。師桜谷から寄せられた「池田君の花譜について」という一文には「唯年少の頃より花木を愛して、その形状、色彩や姿態の変化に多大の興味を感じ一日花を見ざる時は寿命を縮むるより苦しいのである」と述べられています。

特に今回のメイン展示となる《草木写生画卷》は、作者が心血を注ぎ、半生を費やした一巻が約十メートルもの大作です。瑞月の「草花を見つめる

真摯なまなざし」は、見るものの心をつかんで離しません。当初は十四巻制作されたと推測できるものですが十一巻が現存します。昨年、瑞月のご遺族より当館へ寄託をされ、本展開催の契機となったものです。

また池田瑞月の代表作となる《蘭花譜》の再摺と原画もあわせて紹介します。《蘭花譜》は、実業家加賀正太郎が自ら育てた洋蘭をモチーフに監修した、木版画による植物図譜です。本展では、「まぼろし」ともいえる未刊行におわった《蘭花譜》の原画を加賀正太郎のご遺族のご協力を得て展示します。

その他、瑞月にはめずらしい歴史人物画なども瑞月の親戚筋に保管されていたことが、今回明らかになりました。瑞月についてはまだまだ調査の途中ですが、本展を通し、謎多き画家池田瑞月の横顔にせまります。



池田瑞月《草木写生画卷》(部分)



制作中の池田瑞月

琳派

6月1日(木)～7月9日(日) 会期中無休

特別陳列

前田家 武の装いⅡ

6月1日(木)～7月9日(日) 会期中無休

今年も、加賀藩祖・前田利家が天正十一年（一五八三年）六月十四日、金沢城に入城し、金沢の礎を築いた偉業をしのんで開催される「百万石まつり」の季節がやってきました。近年は、黄金の甲冑を身にまとう姿が、利家金沢城入城のイメージとしてすっかり定着しているようです。そこで、この「百万石まつり」で全国からお越しになる皆様には是非ご覧いただきたいのが、Ⅱ期で展示される重要文化財《金小札白糸素懸威胴丸具足》です。

これは全体に漆を塗って金箔を押しした桃山時代の黄金趣味を良く伝える具足で、胸板脇板の形状などに初期の当世具足の特徴が良く表れています。兜は熨斗烏帽子形の変わり兜で、鍔しころの上には、白いヤクの毛でできた引廻しが付いています。具足櫃の由緒

書によると、一五八四年九月、越後の佐々成政が能州羽咋郡の末森城を攻めた際に、利家が救援に駆けつけるまで城を死守して功のあった奥村永福に、利家はその日所用の鍾馗の馬幟、金切裂腰差と鎧兜大小悉く賞として与えたが、のち奥村家より綱利（五代藩主・綱紀）に献上されたことが記されています。

落城寸前にまで追い込まれた籠城軍にとつて佐々軍を背撃し、これを打ち破った利家は、まさに軍神のように思われたことでしょう。そしてこのとき利家が着用していたのが本具足です。末森の合戦は金沢城入城の翌年ですから、あるいは「かぶき者」利家は入城の際もこの出で立ちだったかも知れません。

日本美術の中で、最も人気が高いジャンルのひとつが「琳派」です。琳派を語る際に改めて確認したいのは、琳派は決して表面的なデザインを追求していたのではなく、その造形の根底には確固たる思想があったという事実です。その思想は、善美を尽くした造形は功德となって無数の人々を救済するという『法華経』が説く作善です。琳派の祖と言われる本阿弥光悦や俵屋宗達、そして彼らに私淑した尾形光琳は『法華経』を根本経典とする法華宗の信徒でした。

指揮者のセルジウ・チェリビダッケは、音楽の美は、深遠は真理に人々を誘引する「餌」のようなものだと言っていました。彼の言葉は、日本のみならず世界中から愛好されている琳派の造形にも当てはまるように思います。天台・法華・禅の思想に通暁し、能楽、

茶の湯の深い嗜みがあった琳派の芸術家の作品の前に立つと、親しみやすさとともに、奥深さも感じます。そうした間口の広さが琳派の魅力と言えるでしょう。そして最近、過去帳の調査により、長谷川等伯も俵屋と密接な関わりがあったことが確認されました。謎の多い俵屋宗達が長谷川等伯とどのように結びつのか、興味は尽きません。

今回の展示では、毎年展示のお問い合わせが多い畠文《横繪図》俵屋宗達と本阿弥光徳の《刀絵図》をはじめ、尾形光琳の畠文《蒔絵螺鈿白楽天図硯箱》など、琳派のエッセンスとも言える珠玉の作品を取り合わせました。毎年新たな角度から光が当たる琳派の世界をどうぞご堪能ください。



畠文《横繪図》 俵屋宗達

重文《金小札白糸素懸威胴丸具足》

初夏の優品選

6月1日(木)～7月9日(日) 会期中無休

日本画部門からは、梅原幸雄《神灯に包まれて》を紹介します。本作は、画題からするとヒンドゥー教の女神を祝うディーワリーの頃でしょうか。別名光の「フェステイバル」と呼ばれ、インドでは街中が灯明に包まれる最も華やかな時期です。それとは対照的にここに描かれた女性たちは貧しい身なりですが、楚々とした美しさがあります。梅原は本作で大観賞を受賞しています。その他、東山魁夷《瀧》、石川義《経堂への道》など、重厚で清新な味わいの作品を展示します。

五十四歳の鴨居が、もう描くことがない、空っぽになってしまった自分を描いた《1982年 私》は当館の洋画部門でもっとも問い合わせの多い作品です。物語性が強く、見人によって受け止め方は様々でしょう。いや、鴨居は決して諦めてはいない。自虐的に落ち込んだ振りをしていただけだ。エトセトラ。一枚の絵が多面的に捉えられることは、見る人それぞれの思いを託すことができるのは、名作の証です。

物語性でいえば、脇田和の《車はまだ走っている》も、作者自身をポンコツ車に喩えた含蓄のある作品です。二人ともいったん終わった振りをして見せて、またまだ傑作を描き続けたところが興味深いところ。この他、宮本三郎、高光一也、村田省蔵の代表作を洋画部門では展示します。

彫刻部門からは吉田三郎《山羊を飼う老人》、松田尚之《想》、中村晋也《ミゼレーレVI》など、見応え十分の名品を展示します。



鴨居玲 《1982年 私》

塗りもの —うるしと素地—

6月1日(木)～7月9日(日) 会期中無休

ひとくちに漆器といっても、種類は実に様々です。似た形に見えても、うるしの下に隠された器胎、つまり素地きじによって、質感や重さには確かな違いがあらわれます。今回はうるしを支える素地に注目して、特集を組みました。

最もよく用いられるのは、木材です。生産地ごとに、使用する木の種類はたいがい決まっています。たとえば飛騨春慶には檜や桜が多く用いられますが、輪島塗には地元産のアテ・ケヤキ・ホオを使用することが定められています。また同じ木材でも、処理にはいくつかの方法があります。松田権六《流水桜文 蒔絵神代櫻棗》の素地は刳物で、重要無形文化財「木工」保持者の川北良造が手がけました。一方小森邦衛

《曲輪造三彩重箱》は、木材を輪状にまるめて積み上げる、曲輪造の技法によっています。一つの木材にゆがみが生じても、輪の隙間がそれを受け止めるため、全体的な変化が生じにくいとされます。

木と並んで古くから用いられているのは、竹を素地とする籃胎漆器です。細く裂いて表皮を剥ぎ、それを編んで器胎とします。小森邦衛《曲輪造籃胎盤》は、あえて漆を薄く仕上げ、編み目を作品の表情にいかした作品です。

他にも素地として用いられるものは、皮革・金属・紙・布・陶器など幅広く、それぞれに特色を持っています。今回はできるだけ多くの作例を紹介しながら、形や質感の違い、特色を知っていただきたいと思っています。



《曲輪造三彩重箱》 小森邦衛

第9展示室

第8回

石川県日本画会展

6月21日(水)～25日(日) 会期中無休

「日本画を志すものが、これまでの既存的概念や会派にとらわれることなく、自由で新しい発想によりそれぞれの日本画制作をすることを目的とし、会員相互の協力によってその研究・模索と石川県内での発表の機会を設け、自己の研鑽に努め、石川県の美術文化の発展に寄与する。」とし、日本画の会をスタートして今年で八年目になりました。

若手からベテランまで年齢層は幅広く、モチーフも風景や静物、人物・動物や植物、具象や抽象など多岐にわたり、その視点や表現方法は個性豊かです。ぜひ、この機会に石川県内の日本画家の意欲作をご覧ください。

◇入場無料

◇連絡先／輪島市鶴入町二一三七

石川県日本画会事務局長宮下和司

第7・8展示室

第2回

日本陶磁協会「現代陶芸奨励賞」 福井・石川・富山展

6月1日(木)～11日(日) 会期中無休

日本陶磁協会「現代陶芸奨励賞」は陶芸部門(陶芸作品)及び産業陶器部門(産業陶器)における優れた作品に対して贈られるもので、伝統からオブジェまで幅広い作品を対象とします。記念すべき第2回展は、福井・石川・富山で活躍する陶芸家の入賞・入選作品八十四点が展示されます。六月二日(金)一四時から一六時まで、同館ホールにて大樋陶治斎氏の講演会「現代陶芸の過去・現在・未来」を開催いたします。定員二〇〇名、先着順。

◇入場料／五〇〇円

◇六十五歳以上、中学生以下、及び障害者手帳をお持ちの方(付添者含む)無料

◇連絡先／公益社団法人 日本陶磁協会 事務局

電話・〇三―三二九二―七二二四

石川県水墨画協会は、平成元年度発足、同二年に第一回公募展を開催し今日に至っております。公募展は石川県内の水墨画会諸会派及び一般個人を統合する当協会が行う展示会です。これは、過去の公募展の実績に照らし承認された会員の研鑽の場であると同時に、広く県内より一般公募し、厳正な審査の上入選作を展示し、水墨画の普及発展に寄与することとしております。従って各会派主宰の作品を始め、会員並びに一般公募の意欲的な表現による、楽しみな協会展ならではの作品をご覧くださいいただけます。

多くの方々のご来場をお待ちしております。

◇入場料無料

◇連絡先／金沢市泉二丁目三一―一四

事務局長 能村静代

第8展示室

第2回

風の会

6月21日(水)～25日(日) 会期中無休

春の空にフワリと浮かぶ雲
タンポポの綿毛がフワフワと飛び、モンシロチョウがヒラヒラと舞う、河岸では飛び交うホタルの群れ、頬をなでるこちよい風等に考えている時、ふう(風)を思い付き、全員の気持が一致しました。

自由で新しい発想による絵画制作を目的としています。昨年、石川や富山在住作家や金沢美術工芸大学の学生さんの協力により、第一回の発表の機会を設けることが出来、おかげ様で盛会に終わりました。

抽象、具象を問わず、それぞれの視点や表現方法が個性豊かに現れていることと思います。ぜひ、この機会にご覧いただき、ご指導いただければ幸いです。

◇入場無料

◇後援

◇連絡先

北國新聞社、北國新聞文化センター、テレビ金沢

江守マリ子 金沢市長町一丁目三―三六

電話・〇七六―二二二―一三五八八(自宅)

〇七六―二四四―一七四〇三(アトリ)

辰村浩子

電話・〇九〇―三三二九七―五三六一

第7～9展示室

第28回

石川県水墨画協会公募展

6月14日(水)～18日(日) 会期中無休

第7展示室

2017 北陸二紀展

6月21日(水)～25日(日) 会期中無休

二紀会は「類型化を排する。具象・非具象を論じない。創造的な個性の発現を尊重する。情実を排し新人を抜擢し、積極的に世に送る」の主張を掲げて昭和二十二年以来活動を続けています。北陸二紀展(研究会展)は北陸支部会員が、第七十一回二紀展に向けて制作した作品を展示いたします。

世評を問い、あわせて立見榮男二紀会常務理事をはじめ委員の批評と指導を受けて作品の質の向上を図ります。この機会には是非ご高覧賜りませうご案内申し上げます。

- ◇入場無料
- ◇後援 北國新聞社、テレビ金沢、北陸放送
- ◇連絡先 金沢市泉野出町二一六一九
六反田英一
電話 ○七六一二四三一〇八八二

6月の行事予定

3日(土)	工芸作品の材質と特徴	中澤
10日(土)	池田瑞月と友禅作家・水野博	寺川
17日(土)	池田瑞月と加賀正太郎	前多
24日(土)	漆器素地の特徴と発展―正倉院玉物から近代まで	有賀
■ビデオ上映会	午後1時30分、美術館ホール 入場無料	
4日(日)	日本美術史7―2 日本画の伝統と変革 (25分) 石川の匠たち 漆が呼ぶ里 人間国宝 塩多慶四郎 (23分)	
18日(日)	映画 日本刀―創る人と心と― (31分) 日本の美3 風月のデザイン (26分)	
■土曜講座	午後1時30分、美術館講義室 聴講無料	

日本彫刻会は、具象彫刻を中心に、造形芸術の向上に努めている国内では最大規模の彫刻公募団体です。本展は四月に上野東京都美術館で開催した第四十七回日彫展より芸術院会員をはじめ各種受賞作品と、会員から選抜された優秀作を基本作品とし、石川、富山の地元出品作を合わせ、約九十点を展示します。是非ご高覧いただきますようお願い申し上げます。なお、身体障がい者手帳をお持ちの方と、付き添い二名を入場無料とし、手に触れながらみられる作品も展示します(手形マーク添付)。また、会期中の七月一日(土)には、彫刻のワークショップ「家族で作ろう。みんなの笑顔」を開催します(参加費無料)。日彫会々員が優しく指導しますので是非ご参加下さい。

- ◇入場料 一般五〇〇円 高校・大学生三〇〇円 小中学生無料
- ◇連絡先 金沢美術工芸大学内 石田陽介
電話 ○七六一二六二一三五六八

学芸員コラムご存知ですか

当館ウェブサイトに不定期に掲載されている「学芸員コラム」をご存知でしょうか。トップページ一番上端の部分にある「学芸員コラム」という文字をクリックすると一覽ページへ移動することが出来ます。ここでは学芸員が、展示に対する思いや豆知識、エッセイなどを親しみやすい文調でつづっています。ご来館いただく前にお読みいただければ、展示がより楽しめることと思います。最近では、過去の「美術館だより」に掲載された好評を得た嶋崎丞館長による「美術館小史・余話」を再録連載しています。平成十二年から十六年にかけて連載されていたものです。ぜひ一度、当館ウェブサイトを(※下記URL)にて「学芸員コラム」をチェックしてみてください。

また、当館ではフェイスブックやツイッターなどのSNSも開設しており、多くの人に楽しんでいただいています。こちらにも「学芸員コラム」の更新が通知されていますのでご利用ください。

第7～9展示室

第47回 日彫北陸展

6月28日(水)～7月2日(日) 会期中無休
(午後5時閉室)

土曜講座 開講します

本年度は全二十八回の土曜講座を予定しています。本年度は、特に決まったテーマ設定は行わずに、企画展や特別陳列・特集をはじめとする展示に係る講座や館藏品に関する講座、さらに学芸員の調査等による自由なテーマ等、多彩な講座内容となっています。当館のご鑑賞とあわせご聴講下さい。申込不要・聴講無料です。どうぞお気軽にご参加ください。

No	月/日	タイトル(予定)	担当
1	5月13日	茶の湯の思想―禅とキリスト教との接点	村瀬
2	5月20日	加賀文化にみる文化財修復と今日の文化財修復	高嶋
3	6月3日	工芸作品の材質と特徴	中澤
4	6月10日	池田瑞月と友禅作家・水野博	寺川
5	6月17日	池田瑞月と加賀正太郎	前多
6	6月24日	漆器素地の特徴と発展―正倉院宝物から近代まで	有賀
7	7月1日	描かれた能・狂言―世阿弥から晁斎まで	村上
8	7月8日	鷹と日本人	北澤
9	7月15日	日本の油絵―風景	二木
10	7月29日	長谷川等伯から俵屋宗達へ	村瀬
11	9月2日	石川の文化財5	谷口
12	9月16日	小倉色紙と利休の茶	高嶋
13	9月23日	日本の油絵―人物	二木
14	9月30日	読む京都画壇―画家たちのことばから	前多
15	10月14日	加賀象嵌と高橋介州	中澤
16	11月18日	白山開山1300年 白山信仰の祭礼と能面について	村上
17	12月2日	前田綱紀「百工比照」の思想	村瀬
18	12月9日	素材と彫刻・彫刻と色彩	北澤
19	12月16日	百工比照の研究と新村撰吉	有賀
20	1月6日	友禅―歴史と現在―	寺川
21	1月13日	美術鑑賞について	深山
22	1月20日	絵画の見方―材質と形態	中澤
23	1月27日	近代日本画 筆法見てくらべ	前多
24	2月3日	琳派の草花図をめぐって	有賀
25	2月10日	木村雨山の図案とスケッチ	寺川
26	2月24日	中国の茶書を読む―『茶経』―	村上
27	3月3日	石川の文化財6	谷口
28	3月10日	近代日本と彫刻	北澤

小学生親子対象

夏休み体験講座 参加者募集!

【子ども一日学芸員】 四・五・六年生対象

美術館やそこで働く学芸員の仕事、作品、また、作品の楽しみ方も学びます。

八月四日(金) 九時半～十五時半

定員/親子五組 計十名

参加費/なし

【制作体験】

美術館での作品鑑賞と作品づくりを楽しめます。

◆「丸谷焼の絵付けにチャレンジ」 全学年対象

八月七日(月)

①午前の部(十時～十二時)

②午後の部(十四時～十六時)

定員/各回 親子十五組(一組三名まで)

参加費/親子二名で一五〇〇円程度

◆「型染めでおしゃれエプロン」 全学年対象

八月九日(水) 十三時半～十六時

定員/親子十五組(一組三名まで)

参加費/親子二名で一五〇〇円程度

○体験講座お申し込み方法(往復はがき)

〒九二〇〇九六三 金沢市出羽町二―一

石川県立美術館 キッズ・プログラム宛。

往信欄に、参加希望の講座名・参加者全員の氏名・学年・住所・

電話番号をお書きください。

応募締め切り・七月二十四日(月) 必着

*定員を上回った場合は抽選



昨年の体験講座の様子から

《漆皮盤》しっぴばん

昭和37年(1962) 第9回日本伝統工芸展 口径41.6×底径28.0×高5.2

新村撰吉 しんむら・せんきち

明治40年～昭和58年(1907-1983)



皮革を素地とする漆器を漆皮といい、奈良時代までの遺品にはしばしば見られます。皮を水に浸し、柔らかくしてから木型にあて、槌で打ってなじませます。それから縄で締めつけると、木型にぴったり合った素地ができあがります。木型を抜き、漆を塗り重ねて完成です。つぎはぎのない一枚皮から作るため、円みを帯びた、素朴な形となります。軽く、衝撃に強いことも特徴です。ただし非常な手間や材料がかかる上、表面にあらわれる皮特有の凹凸は、平安時代から流行・発展した蒔絵技法とはあまり相性がよくなかったようです。こうした要因から、漆皮はやがて木素地に取って代わられ、衰微してしまいます。

新村撰吉がこの技法に魅せられたのは、正倉院の曝涼で《金銀平脱漆皮箱》を見たときでした。新村は金沢市に生まれ、石川県立工業学校から東京美術学校へ進み、六角紫水や松田権六の指導を受けました。のち自らも東京芸大の美術学部で教鞭をとり、教え子には増村紀一郎がいます。

展示中の《漆皮盤》は、皮の上に透漆を重ねることで、素地の風合いを活かした作品です。色漆と平目粉で幾何学文様を描き、古雅な趣をたえています。日本では最も古い素地のひとつ、漆皮の魅力にぜひ触れていただきたく思います。

次の展覧会

平成29年7月13日(木)～8月27日(日)

前田育徳会尊経閣文庫分館	第2展示室	第3展示室
前田家の名宝 I	北陸ゆかりの画聖 I	脇田和一かくれんぼー
第4展示室	第5展示室	第6展示室
優品選 [絵画・彫刻]	石川のやきもの 青と赤	夏休み親子で楽しむ美術館 アートdeまんぶく

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 360円(290円)

大学生 290円(230円)

高校生以下 無料

※()内は団体料金

毎月第1月曜日はコレクション

展示室無料の日(7月は3日)

今月の開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後7:00 年中無休

6月は無休で閉館しています

健康告知なしでカンタンに入れる
女性のための保険

月払 **400円** (全年齢一律)

お手頃な保険料に関心がある方へ
無告知型女性特有疾病一時金保険

なでして 保険

通話無料 **0037-6001-63967**

受付時間 **10～19時** (日曜定休)

お気軽にお問合せください!

引受保険会社 **さくら少額短期保険株式会社**

〒171-0014
東京都豊島区池袋二丁目16番13号 光ビル

保険専任代理店 **株式会社ニュートン・フィナンシャル・コンサルティング**

広告有効期限:2017年12月31日 承認番号[343-HNN,1612]

※無告知で入れる女性特有疾病一時金保険について (2016年11月現在さくら少額専属へ)

石川県立美術館だより
第404号(毎月発行)
2017年6月1日発行

〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL <http://www.ishiki.pref.ishikawa.jp/>